

## 『信用金庫の地域貢献と存在意義の再考』

### 一 戦前の信用組合による病院建設を事例として一

滋賀大学大学院 元持敏雄

いま、協同組織金融機関である信用金庫の存在意義が問われている。その原因の一つには、協同組織の特質である地域制や会員制等を見失い、時代の変化とともに他業態に同質化してしまった。その結果、大きな資本の力によって組織は侵食され形骸化され、信用金庫の特質を喪失してしまったところにこうした議論が起こっている。

協同組合銀行の起源は、1850年ドイツのヘルマン・シュルツェ・デーリッツによって設立された相互貸付組合にある。19世紀ドイツ資本主義が急速に展開される中で、都市における手工業者と農村における小農民の困窮が社会的問題化した。シュルツェ・デーリッツはこの時、真に実効ある援助は手工業者等の弱者自身による自主的な努力に基づいて、個々の小さな力を一つの経済組織に結合し、その結合力によって自らの物資を確保させることであると考えていた。1850年3月「自助」と「連帯」の思想を掲げて、手工業者等の安定した資金を提供する貸付組合の設立を呼びかけたのが始まりであった。

シュルツェの立ち上げた思想は、日本の小さな地方の信用組合の手によって活かされていた。1922年滋賀県に「有限責任八幡町信用組合」が地元の住民の手によって設立された。組合は、当初小商工業者への安定した資金の供給を目的として設立されていたが、のちに地元で不足する医療施設「組合立八幡病院」（後の「近江八幡市立八幡病院」）を設立した。

信用組合は「購買利用組合」に組織変更して、組合員に不足する医薬品の提供や病院施設の利用が出来る組織に改めたのである。当時は第二次世界大戦が始まり日本は軍事一色の時代であったが、信用組合の手によって人・物・金が集められ、会員が真に求めているものを提供するために奔走した。信用組合には、多くの組合員が集まり大きな成果をあげたのである。まさに協同組織の思想を実現したのであった。

わが国の各地に誕生した協同組織金融機関の初期には、こうした地元貢献事業が多く展開されてきた。協同組織金融機関は、その時々地域や会員が真に求めているものを工夫して提供し特質を發揮してきた。求められるものは、安定した資金かもしれないし、人や物、情報、地域開発かも知れない。その特質を活かして実現していくのが、いつの時代も協同組織金融機関の使命である。そのためには、厳しい金融機関競争に勝ち残って存続し続けることが、使命は果たせるのである。

信用金庫は、現在も預金高シェアは増加し国民大衆からの支持は大きい。これからも信用金庫が信用金庫の特質を見失わず現代に活かす工夫を怠らない限り、市場から存在意義を問われる議論はない。間違っ信用金庫を見失い、メガバンクと同じ土俵で同じルールで戦うとすれば、また議論が繰り返されるのである。信用金庫の存在意義を再考する。